

18. 地域特産種増殖技術 開発試験

地域特産種増殖技術開発試験

増殖科 杉本昌彦

本試験は、地方特産魚介類の増殖技術を開発し、資源の増大を図ることによって、特徴のある地域的栽培漁業の定着化を促進することを目的に、国の補助により、昭和63年度から5カ年計画で地域特産種増殖技術開発事業として実施しているものである。

対象種であるノギリガザミは、浦戸湾の特産として、地域の漁業にとって重要な役割を担っている。

内容については、既報（平成2年度地域特産種増殖技術開発事業魚類、甲殻類グループ総合報告書（1991））で詳細に述べているので、ここでは要約を報告する。

要 約

1. 種苗生産技術開発

- 1) 親ガニ養成施設の規模は少なくとも $770\text{mm} \times 520\text{mm}$ が必要であった。
- 2) 親ガニの餌料については、卵質向上を目的としてモイストペレットの投与を試みたが、砕けた残餌に真菌類が繁殖し、水槽底に敷いた砂泥の悪化を招いた。
- 3) 抱卵個体には、脱卵や一部ふ化する個体がみられた。
- 4) ふ化は、水温の急激な上昇により、多くの個体で一斉に行われたため、追試や再試ができない等の制約があった。また、プレゾエアでのふ化も確認された。
- 5) 平均水温 T (°C) と発育日数 D (日) の逆数 $1/D$ についての直線回帰式を求めると $1/D = 0.00567T - 0.0755$ ($r = 0.99146$) が得られ、基準水温 13.31°C で平均有効積算水温は $178.0^\circ\text{C} \cdot \text{日}$ であった。
- 6) 飼育水の水質管理に注意して種苗生産を試みたが、 Z_4 から Z_5 にかけて斃死した。その原因は、高密度飼育等による環境悪化と疾病ではないかと考えられた。

2. 中間育成技術開発

- 1) 宿毛市水産振興協議会及び高知市漁業協同組合が、日本栽培漁業協会から稚ガニを各々4,000尾と120,000尾受け入れ中間育成を行った結果、平均甲幅は各々 45.8mm 及び 24.2mm 、生存率は 19.3% 及び 9.0% であった。
- 2) 事業規模での生残密度は甲幅 20mm (C_6) で $50 \sim 100$ 個体/ m^2 にあると考えられ、本年の結果は比較的良好であったと思われる。

3. 資源添加技術開発

- 1) 遊泳脚の指節を関節から切除する標識方法は、甲幅50mm以上の個体で2回目の脱皮が行われるまで有効であった。
- 2) 稚ガニは、放流直後、若干の逸散がみられたが、成ガニほど移動はしなかった。
- 3) 種苗の放流は、浦戸湾の調査されたかなり広い範囲に分散させることも効率のよい方法であると考えられた。
- 4) 放流時の操業区域での漁獲資源量は、約5,000尾と推定された。
- 5) 浦戸湾では、9月を中心とした漁獲量が年間の漁獲量を左右し、甲幅15.3mm (C₅) サイズで約6万尾の放流において、放流効果が期待できると考えられた。